

“来”の代動詞的用法とダイクシス

池田 晋

(東京大学・院)

提要 本文以“来”の代動詞用法を研究対象として、論述此用法產生的動因。在論述的過程中本文特別重視“直指 Deixis”研究的成果。本文將通過“来”“去”和指示代詞“这”“那”的比較來探討“来”“去”的直指性特征。本文指出“来”の代動詞用法，其實是由連動結構“来+VP”發展而來的，而且其發展過程，跟“这/那+數量詞+名詞”結構在某種條件下可以說成“这/那+數量詞”的現象完全平行。本文認為，漢語中“来”“去”和“这”“那”在結構上和功能上都有一定的平行性，而這種平行性在代動詞用法的產生上起着關鍵性的作用。

关键词 代動詞用法 直指 連動結構

1. はじめに

現代中国語において、“来”には以下のような用法が存在する。

- (1) 咱们先来一杯醒醒胃口，饭后再来一杯。(钱钟书《围城》)
(まず一杯やって腹を減らして、飯の後にもう一杯やろう。)
- (2) ……摇头不算点头算，来个干脆的。(老舍《茶馆》)
(首を横に振ればノー、縦ならイエス、はっきりしろ。)
- (3) 掌柜的，长辛店大战的新闻，来一张瞧瞧？(老舍《茶馆》)
(親父、長辛店での戦争のニュースだ、一部どうだい?)

以上の例において、“来”が表すのは空間移動ではなく、各々の発話現場で求められる具体的な動作である。例えば、(1)の例では“喝”に替わり“来”が「酒を飲む」という行為を表す。(2)の“来”は、イエスかノーか、いずれかの回答を「する」という意味を表す。(3)は、新聞売りが新聞を売りつける場面で、ここでの“来”は「買え」という意味に相当する。

本稿では“来”のこうした用法を「代動詞的用法 pro-verbal usage」と名付けることにする¹⁾。この“来”の代動詞的用法を主な考察の対象とし、この種の用法の発生を動機付ける意味的および構文的要因を明らかにした

い。

また本稿は、“来”がダイクティックな意味を表す動詞である点に特に着目し、ダイクシスの観点から本節で提起した問題について考えたい。具体的には、最も代表的なダイクシス表現である指示詞“这”“那”の用法を考慮に入れながら議論を進める。“来”“去”と“这”“那”の比較を通して、両者の間には、実は認知的な共通性が潜んでいることを明らかにしたい。そしてこの共通性が“来”の代動詞的用法発生の鍵となっていることを論じる。

2. “来”“去”の用法

まず、“来”およびその反義語“去”について、動詞句内での用いられ方を考察する。“来”“去”の用法は、大きく分けて、①単独で用いる用法、②“走进来”“跑出去”のように方向補語として用いる用法、そして③“来找”“去看”などのように連動構造の前方の動詞句として用いる用法が挙げられる。以下、この3種の用法を詳しく見ていくことにする。

2.1. 単独用法

(4) 老郑明天来北京。(鄭さんは明日北京に来る。)

(5) 小花的妈，来吧，咱们商量商量！（老舍《茶馆》）

（小花の母さんよ、こっちに*来*い、話をしようじゃないか。）

(6) (命令的) 快去，她不在那儿。(曹禺《雷雨》)

（…早く行きなさい、彼女はそこにはおらん。）

これらの例で、“来”“去”が表すのは、ある場所から別の場所への物理的な移動であり、そこには場所の意味が必ず含まれている。(4)であれば“北京”という場所目的語が文中に含まれており、聞き手は「よその場所」から「北京」へ来るのだ、という情報を得ることができる。一方、(5)(6)では、場所を表す語は表面上見られないが、これらの例においては、“来”“去”によって場所概念が表現される。“来”“去”とは、話し手の視点で主観的に設定される空間を参照点とし、ダイクティックに認識される移動を表すものである。話し手の視点で主観的に設定される空間とは、話し手の「領域」「なわばり」にほかならない。この領域内と領域外とが対立する場所として区別されるわけである。本稿では、木村 1996:219-220 に倣

い、話し手の領域内を「“咱们”の領域」、領域外の空間を「“他们”の領域」と呼ぶことにする。したがって、“来”は“他们”の領域から“咱们”の領域への移動を、“去”は“咱们”の領域から“他们”の領域への移動を表すことになる。(4)では、この“咱们”の領域と“北京”とが一致しているということになる。

2.2. 方向補語用法

“来”“去”は方向補語としても用いられる。“来”“去”を方向補語として用いる動詞句をここでは「方向補語句」と呼ぶことにする。方向補語句は、“来”“去”のみが補語として主要動詞に結合するパターンと、“上”“下”“进”“出”“回”“过”“起”のような客観方向補語を間にはさみ、最後に“来”“去”が置かれるパターンの2つに大別される。本稿では、後者のパターンを「複合方向補語」と呼ぶことにする。まず、複合方向補語句について見てみたい。

複合方向補語句が空間移動の意味を表す場合、以下のような制約がみられる。

- (7) *小王走进了。(王くんが歩いて入った)
- (8) 小王走进了房子。(王くんが歩いて部屋に入った)
- (9) 小王走进房子来/去了。(王くんが歩いて部屋に入ってきた/いった)
- (10) 小王走进来/去了。(王くんが歩いて入ってきた/いった)

まず、(7)のように動作の様態を表す主要動詞に客観方向補語“上”“下”“进”“出”“回”“过”“起”を添えるだけでは不適格な表現となる²⁾。“进”などによって表される移動は、必ず移動の参照点となる場所が必要となり、正しくは(8)のように場所目的語を伴わなくてはならない。(7)の不成立は場所表現の欠如に起因すると考えられる。

(9)では、場所目的語が明示されており、“进”の参照点は既に補足済みであるにも関わらず、さらに“来”“去”が後続する。これにより、「歩いて建物に入る」というように客観的事態を述べつくした上で、さらに、話し手の主観的視点から相対的な位置関係で、そのイベントを捉え直すという操作をおこなう。すなわち、客観的視点から見て“走进房子”と理解されるその移動は、話し手の立場から捉え直すと、「こっちむきの“走进房

子”]、「むこうむきの“走进房子”]である、ということ²を述べ直しているわけである。(9)に見られるような“来”“去”は、意味の面からいえば、決して必須のものではなく、ただ話し手の主観を付け加えるだけのオプション的なものであるといつてよい。

また、(10)のように、場所目的語を用いず、“来”“去”だけを加えることもある。前述のように“来”“去”はダイクティックな場所を含意するから、それにより暗示される“咱们”の領域、“他们”の領域が場所目的語の代わりをしていることになる。

ここで注意すべき点は、前後の文脈からたとえ移動に関わる場所が明らかかな場合でも、(10)のように“来”“去”を加えなくてはならず、(8)から場所目的語だけを省略して(7)のような形の表現にすることはできない、ということである。

つまり、空間移動を表す客観方向補語句は、仮に談話上場所の概念が自明であったとしても、統語的には場所を表す成分を省略することができず、必ず目的語か“来”“去”を伴っていないてはならない。(9)のように目的語と“来”“去”の両方が同時に用いられることはあっても、(7)のように目的語も“来”“去”も用いないという例は成立しない³。

次に、“来”“去”のみが補語として用いられるパターンを見てみたい。

(11) 王利发和崔久峰由后面慢慢走来。(老舍《茶馆》)

(王利発と崔久峰が後ろからゆっくりと歩いてくる。)

(12) 宋妈出去走了以后，可不是，雨立刻下大了。(林海音《城南旧事》)

(宋媽が出て行った後、やはり雨はすぐに強くなった。)

(11)は客観方向補語を用いず、主要動詞に“来”“去”のみを添える例で、主観的視点からの相対的位置関係のみで移動を認識している。(10)と同様、これらの例でも“来”“去”を落とすことはできない。“来”“去”を欠く場合、“慢慢走”はただ「歩く」という意味にしかならず、「ある場所から別の場所へ」という移動の意味を表現し得ない。したがって、“*由后面慢慢走”は成立しない。(12)は、客観方向補語“出”が主要動詞として用いられているが、やはり“来”“去”か場所目的語のいずれかが必要になる。“*宋妈出_レ走了以后，可不是，雨立刻下大了。”は明らかに不自然である。

方向補語という空間移動を表す表現において、移動の向きを主観的視点から捉える“来”“去”という成分が、文の成立に大きく寄与していることが伺えよう。

2.3. 連動構造

“来”“去”は、連動構造“VP₁ + VP₂”のVP₁としても用いられる。VP₁は、単独の“来”“去”によって担われる場合と、方向補語句によって担われる場合がある。

- (13) 不知等了多久，始终没人来拉骆驼。(老舍《骆驼祥子》)
(いくら待っても誰も駱駝を引きに来なかった。)
- (14) 半夜里二少爷忽然把我叫起来，说客厅又闹鬼，叫我一个人去看。看。(曹禺《雷雨》)
(夜中に2番目の坊ちゃんが突然私を起こして、客室に幽霊が出たから、見に行けと言うんです。)
- (15) 有的赶过来问：“怎么了，祥子？”(老舍《骆驼祥子》)
(あるものは駆け寄ってきて尋ねた。「どうしたんだ、祥子?」)
- (16) 觉慧把手缩回来，又躺下去看书。(巴金《家》)
(覚慧は手を引っ込め、再び横になって本を読み出した。)
- (17) “那么多的照片哪，多好看哪，爸爸，过来看看。”(林斤澜《春节》)
(写真があんなにたくさん！きれいだよ、父さん、こっちに来て見てみなよ。)

上の5例のうち(13)(14)の下線部は単独の“来”“去”がVP₁となるパターン、(15)(16)(17)の下線部は方向補語句がVP₁となるパターンである。

いずれの例でも、VP₁が、“咱们”の領域もしくは“他们”の領域への空間移動を表す。このため、後続するVP₂という動作行為は、結果として“咱们”の領域もしくは“他们”の領域でおこなわれることになる。例えば(13)では、まず動作主は“来”という移動により、語り手から見た“咱们”の領域に到達する。そして、その領域内で次の“拉骆驼”という行為をおこなう。仮にVP₁が方向補語句であっても同様で、例えば(17)であれば、父親は“过”という経路で“咱们”の領域まで移動し、その領域内で“看看”することを、子供に要求されていることになる。

この構造を詳しく分析し直すと、まず、VP₁が方向補語句である場合は、

主要動詞や客観方向補語が移動の手段・経路を表す。これに続く“来”“去”は、“咱们”の領域、“他们”の領域への到達を示すとともに、VP₂という動作行為がおこなわれる位置をダイクティックに特定する。このことを図式化すれば次のように示される。

(18) (VP₁) 来这儿 / 去那儿 ⇒ 在这儿 / 那儿 VP₂

“来”“去”という動詞は、それ自身が移動という独自の意味を表しながらも、後続する動作行為 VP₂の実現場所を特定するという点で、VP₂とも強い意味的繋がりを持っているのである。その意味で、単に2つの動作が時間的に連続していることを示すだけの連動構造とは異なり、空間的な緊密性をも含んでいることになる。

この連動構造は単に2つの動作の時間的連続性のみを表しているのではない。VP₁は空間移動を表すと同時に、次に発生するVP₂の為に舞台を設置する——さらにはいえば舞台の幕を開ける——という役割をも担っているわけである。そして、この舞台設置の機能、言い換えればVP₁とVP₂を「繋ぐ」機能は、“来”“去”によって担われている。当然、“来”“去”を省略すれば、この繋がりには失われてしまう。

VP₁が複合方向補語句の場合、(15')(16')のように、“来”“去”が欠ければ不自然になり、“VP₁+VP₂”は成り立たなくなる。

(15') *有的赶过 ϕ 问：“怎么了，祥子？”

(16') *觉慧把手缩回来，又躺下 ϕ 看书。

もっとも、(19)のように、“来”“去”のかわりに場所目的語を加えれば、文法的にも成立するし、文を切らずに、次のVP₂まで繋ぐことも可能である。

(19) 轻轻走进惠安馆，推开跨院的门（林海音《城南旧事》）

（そつと惠安館に入り、庭に出る扉を押し開けた。）

ただし、その場合はVP₁とVP₂の間に読点を挟むことが多く、もはや連動構文を構成し得ない。読点を挟まずにVP₂に繋がる例としては“咱们进屋沏壶好茶，好好聊聊。（部屋に入って、お茶でも入れて話そう）（叶广苓《全家福》）”などがあるが、その数は多くない。無論、VP₁が“来”“去”で終わる場合でも、VP₂との間に読点を挟むことはありうる。しかし、割合で見ればVP₁が“来”“去”で終わる場合は、読点なしで次に繋がるケー

スが過半数を占める。老舎の小説《骆驼祥子》(約10万字)を例にとって、空間移動を表すVP₁が、他の語を挟まずに、後方のVP₂へと繋がる表現を検索したところ⁴⁾、VP₁が“来”“去”で終わる例は全部で286例見つかった。このうち、VP₁とVP₂の間に読点を挟む

表1

		VP ₁ の最後	
		“来”“去”	場所目的語
読点	有	58	15
	無	228	8
合計		286	23

ものは58例、読点を含まないものは228例であった。一方、VP₁が場所目的語で終わる例は、わずか23例しか見つからなかった。このうち読点を挟むものは15例、読点を含まないものは8例であった。一応、読点を含まない例の方が含まない例よりも多いことが分かるが、それ以前に、場所目的語の直後にVP₂が続くこと自体が少ないようである。

上の数字は、“VP₁ + VP₂”という連動構造の成立にとって最も重要なのは、VP₁の到達場所とVP₂の実現場所が単に一致しているか否かではなく、話し手がダイクティックな主観的観点からVP₁の到達場所とVP₂の実現場所が一致していると認識しているか否かである、ということを示している。つまり、話し手が主観的判断によってVP₁の到達場所とVP₂の実現場所が一致していると認識してこそ、連動構造という「1つ」の述語でもって表現し得る「1つ」の事態としての認識が可能になるのである。“来”“去”の持つ主観性こそが、VP₁とVP₂を「1つ」の事態として結びつける為の必須要素なのであり、このことは言い換えれば、VP₁とVP₂の空間的な緊密性を損なわずに、両者を「繋ぐ」接着剤として真に機能し得るものは“来”“去”しかない、ということにもなる。

“来”“去”がこの種の「繋ぐ」機能を發揮して、VP₁とVP₂とが1つのまとまりを構成し得ることこそが、代動詞的用法獲得の為の第一歩であると考えられる。

なお、本稿では以後、“来”“去”の繋ぐ機能を強調する為、複合方向補語句VP₁を、“来/去”とそれ以外の部分の2つに分けて示すことにしたい。“来/去”を除いた部分は“VP₁'”と記すことにする。したがって、VP₁は今後“VP₁' + 来/去”と書き表す。

3. “来”“去”と“这”“那”の平行性

3.1. NP₁ + 这／那 + NP₂ ～ “这”“那”の繋ぐ機能～

“VP₁' + 来／去 + VP₂”において“来”“去”はVP₁'とVP₂を繋ぐ働きをしているが、これに類似する以下のような現象が、指示詞句においても見られる⁵⁾。

(20) 我这一双眼睛、他那本书、小王那辆车

(わたしのこの両目、彼のあの本、王くんのあの車)

(21) 她怕院中那些男人们斜着眼看她，… (老舍《骆驼祥子》)

(彼女は庭のあの男たちに見られるのを恐れていた。)

(22) 连你这身衣裳都一进狱门就得剥下来。(老舍《骆驼祥子》)

(お前のこの服も豚箱にぶち込まれれば、剥ぎ取られちまうのさ。)

(23) 刚才那个人未必一定是侦探。(老舍《骆驼祥子》)

(さっきのあの人はおそらく探偵に違いない。)

(20)は、“这”“那”を介して、“我”と“一双眼睛”、“他”と“(一)本书”、“小王”と“(一)辆车”が結び付いている。木村 1983:311-316の言うように、いずれも「NP₂がNP₁に属する」「NP₁がNP₂を所有する」のように解釈することが可能である。(21)以下の例も、それぞれ“男人们”が“院中”という空間に、(22)“这身衣裳”が“你”の領域に、(23)“那个人”が“刚才”という時間に属す、という形で解釈することができる。

また、木村 1983:307-310によれば、指示詞“这”“那”には、その前方の名詞と接合する「前接」機能と、後方の名詞にかかる「後係」機能が、本来的に備わっているという。前接機能とは、指示詞が、本来「指す」機能を持たないNP₁と結合することにより、“NP₁ + 这／那”という構造全体に指示詞と同等の機能を付与するというものである。木村 1983:310では、“NP₁ + 这／那”という構造を「指示詞相当句」と名付けている。

後係機能とは、指示詞が数量詞付きの名詞句にかかっていく“这(一)本书”のような用法のことである。“这”“那”は、数量詞付き名詞句“(数量詞 + N)”で表される「離散的個体としての〈モノ〉」を、ダイクティックに特定することができる⁶⁾。本小節タイトルの“NP₂”は、まさにこの離散的個体としての〈モノ〉に当たる。

“这（一）本书”は指示詞の後係機能だけが発現した例であるが、当然、前接機能だけが発現した用法も存在する。“我这儿”や“他那儿”のような例がそれであり、指示詞は必ず“这儿”“那儿”、“这里”“那里”という形で用いられる。この“这儿”をはじめとする“这”“那”の機能的な異形態は⁷⁾、“我这儿”のような前接機能のみを有し、“*这儿一本书”のような後係機能を持たない。これは、“这”“那”が“这一本书”という後係機能は持つのに、そのままの形では“我这”と前接の役割を果たせないことと正反対である。両者は、木村 1983:304-307 の指摘するように相補関係にあるのだと考えられる。

再び(20)～(23)に話を戻すと、これらは“这”“那”の持つ前接機能と後係機能が同時に発現したものであることが分かる。“这”“那”は、前接機能により、前方の NP₁ と指示詞相当句を構成した上で、後係機能により、後方の NP₂ にかかっていくことができるのである。前接・後係という2つの機能が同時に活性化することで、“这”“那”は、NP₁ と NP₂ を「繋ぐ」為の接着剤としての働きを担うことができるのだといえる。

以上のような木村 1983 の論述を思い出すとき、我々は、“这”“那”の「繋ぐ」機能と“来”“去”の「繋ぐ」機能との間に、構造上の平行性を認めることができる。

既に見たように、“来”“去”は、前方の主要動詞と結合して（複合）方向補語句を形成することもできるし、後方に VP₂ を伴って連動構造を形成することもできる。

前接←		→後係
(16) 躺下	去	看书
(20) 我	这	一双眼睛

3.2. “这”“那”の用法

ここで、“这”“那”の用法を、本稿の議論と関わる範囲で概観しておくことにしたい。前節の「繋ぐ」機能以外にも、“来”“去”と“这”“那”には類似性があることを見ていく。

まず、指示詞を単独で用いる場合であるが、これは木村 1990 のいうように「方向指示の為の矢印や指差しのように、対象のありかを知らせるべくそれを『指し示す』だけの役割を担うもの」とであると定義される。つま

り、“这”“那”単独では、ダイクティックな空間を指差すだけの機能しか持たないのである。空間を指すだけで、事物を表示さず、その意味するところは実質性を欠き、単独では名詞相当のものとしては機能しない。

“这”“那”は、前述した後係機能を發揮し、“这／那+(数)量+N”という形式を構成することで、はじめて名詞相当の構造として振舞うことができる。たとえば、“这一本书”(この本)、“那两支笔”(あの2本のペン)のような形である。指示詞“这”“那”はいずれも(数)量詞を介して名詞にかかっているが、中国語では基本的に(数)量詞の介在なしで指示詞は名詞にかかることができない⁸⁾。大河内 1985 の指摘するように、中国語の名詞は、裸の形では抽象的な一般的概念しか表し得ない。そこで、数量詞を加えるという操作をおこない、その名詞の表す〈モノ〉が具体的な個体であることを表さなくてはならないのである。

また、これも周知の事実ではあるが、“这／那+(数)量+N”は、コンテキスト次第で名詞を省略して“这／那+(数)量”と言い換えることが可能である。一度話題にのぼったものやコンテキストの中で指示対象が明らかかなものであれば、何度も名詞部分を繰り返さなくても、“这／那+(数)量”で代用が可能になるのである。

ところで、指示詞句“这／那+(数)量+N”は、構造的にも意味的にも、方向補語句と類似している。下図を見られたい。

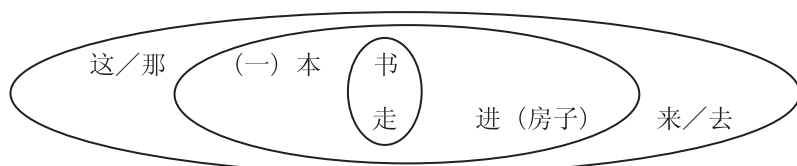


図1

それぞれ“书”“走”が主要部であると考えた場合、指示詞句にしろ方向補語句にしろ、主要部から外側へ広がっていく。指示詞句の場合は主要部から見て前方へ、方向補語句の場合は主要部から後方へと拡張する。主要部の1つ外側には、それぞれ(数)量詞、客観方向補語(+場所目的語)を伴う。量詞とは本来事物を具体化し、実体化するものであり、客観方向

補語とは運動に方向を与え、空間化するものである。それらはいずれも主要部に空間的な実存性を付与する役割を果たす成分であると捉えることができる⁹⁾。こうして実存的、具象的な形をもって認識された〈モノ〉や〈プロセス〉に対して、最も外側に位置するダイクシス成分が主観的な判断として付け加えられる。主要部からの拡張の方向こそ異なるが、同じ層に属している成分同士は類似の機能を担っているのである。

このような点でも、“来”“去”と“这”“那”の間には平行性を見い出すことができる。

4. 代動詞的用法発生メカニズム

4.1. 指示詞の名詞句特定と連動構造“来+VP₂”

本節では、3節までの考察をふまえて、“来”の代動詞的用法発生の要因を考える。

本稿で特に注目したいのは3節で見た指示詞の後係機能である。指示詞は(数)量詞付き名詞句に後係するという機能を持つが、“这/那+(数)量+N”構造には、“这/那+(数)量”部分をもって主要部であるNを代用できるという特性がある。

これと同様のことが、単独の“来”を用いた連動構造においても見られる。次の例は、曹禺の話劇《雷雨》の中のくだりであるが、“来”が2度用いられている。

(24) 周繁漪 大概窗户没有开。

周冲 让我来开。

鲁四风 老爷说过不叫开，说外面比屋里热。

周繁漪 不，四风，开开它。(略)

周冲 [见四风很费力地移动窗前的花盆] 四风，你不要动，让我来。

(周繁漪：おそらく窓が開いていないせいね。

周冲：ほくが開けるよ。

鲁四风：旦那様が開けないようにとのことです、外は中より暑いからと。(略)

周冲：〔四风が必死で窓際の花瓶をどかそうとするのを見て〕四

鳳、いいよ、ぼくがやるよ。)

これは周繁漪が窓を開けるよう催促する場面であるが、はじめに息子の周冲が「僕が開けるよ」と言うときには“来开”という表現を使っている。その後、結局使用人の魯四凤が窓を開けに行くことになるが、窓際に物が置いてあったりして手間取ってしまう。見かねた周冲が、再び「ぼくがやるよ」と言うときには、“来”というように“开”を落として表現している。2度目になると、“来开”の“开”が、“来”で代用されてしまうのである。

これはまさしく指示詞句“这本书”において、中心部の名詞が省略されて、“这本”がその代用をするのと平行する現象であると考えられる。“这本”が“这本书”を代用できたのと同じように、“来”もまた“来开”を代用できる。代動詞的用法とは、ダイクシス“来”によるVP₂の代用表現にほかならないと考えられる。

先にも述べたように、連動構造において“来”は“咱们”の領域への到達を表すと同時に、後に続くVP₂を主観的位置付けによって特定している。主観的位置付けによる特定という点では指示詞の後係機能と変わらない。後係機能を持つ指示詞が後続の名詞に対して代用機能を果たし得るように、“来”もまた後方のVP₂を代用し得ると考えられる。

(24) から、“来+VP”という表現が代動詞的用法のソースであることが伺えるが、実は(24)における“来开”の“来”は既に文法化を経ており、その意味は、空間移動という実義から、〈積極性〉というモーダルな意味へと弱化している。代動詞的用法のソースが、空間移動を表す実義的な“来”から成る“来+VP”ではなく、一定の文法化を経た〈積極性〉を表す“来”から成る“来+VP”であるという認識は重要である¹⁰⁾。

次の例に示すように、“来”“去”はともに一定の文法化を起こしており、“来/去+VP”という構造において、動作行為VPに対する〈積極性〉を表す用法を持っている。

(25) 你去买车票，我来收拾行李。

(君は切符を買ってきて、ぼくは荷物を片付けるから)

(26) 你说没有人安慰你，让我来安慰你。(巴金《家》)

(誰も慰めてくれる人がないのなら、あたしがお慰めいたします。)

(27) 我现在身体不大好，想在家休养，要你来帮我料理家事…（巴金《家》）

（私は体調が悪くて、家で休んでいたいから、おまえわたしのかわりに家事を管理してくれ…）

(28) 好！好！咱们永远在一块儿，你去挣钱，我去念书。（老舍《茶馆》）

（分かった分かった、俺らはずっと一緒だ、お前が金を稼いで、俺が学問をやる。）

いずれも、空間移動という実義は薄れ、VP に対する〈積極性〉の意味へ変化している。

ここで注意すべきは、この種の“来”には語用論的な制限がある、という点である。この種の“来”は、積極的にある動作行為をおこなおうとする話し手自身の意思を表す文か、聞き手に対して〈積極性〉を要求する文においてしか用いることができない。したがって、この“来”は、已然の事態に対して積極的に実行した、という意味は表し得ないし、話し手と聞き手以外の第三者の〈積極性〉を表すこともできない。(25)を(25')(25')の網掛け部のように書き換えた場合、文法的には成立するが、〈積極性〉の意味は失われてしまう。

(25') # 我来收拾了行李。(荷物^{●●}を片付け^{●●}に来た)

(25') # 他^{●●}来收拾行李^{●●}!)。(彼が荷物^{●●}を片付け^{●●}に来る)

一方、“去”のほうは、已然の事態に対する〈積極性〉こそ表し得ないものの、第三者の動作行為に対する〈積極性〉は表すことができる。

(29) 非过了这一关，他不能放胆的去跑。（老舍《骆驼祥子》）

（この関門を越えない限り、安心して走ることにはできない。）

(30) 他不过觉得做一个“男儿”应该抛弃家庭到外头去，一个人去创造出一番不寻常的事业。（彼はただ、男たるものは家庭を捨てて外へ飛び出し、ひとりで何か非凡な仕事を為すべきだと考えていただけなのだ。）（巴金《家》）

“来”と“去”は、いずれも〈積極性〉を表す用法へと文法化してはいるが、その語用論的な制限については、両者の間で差が見られるのである。

“来”が代動詞の用法を獲得する為には、まず“来”が物理的な空間移動の意味から文法化し、上記の例のような〈積極性〉の意味へと拡張して

いることが条件となる。こうしたモーダルな意味を表す“来”のみが、VP₂の代用表現として機能し得るのである。

また、代動詞的用法発生のもう1つの条件として、当然ながら、VP₂が発話現場やコンテキストなどから十分に推測可能でなくてはならない、という点が挙げられよう。(24)の例で、「窓を開ける」という行為は話題の中心であり、発話現場内で最も実現に期待のかかっている行為である。VP₂は暗黙の了解として共有された情報でなくてはならない。

代動詞的用法は、以上の2条件が満たされて、はじめて発生するものである。

4.2. “来”の代動詞的用法

冒頭の代動詞的用法の例を見てみると、やはり(25)(26)(27)との間に繋がりが感じられる。

- (1) 咱们先来一杯醒醒胃口，饭后再来一杯。(钱钟书《围城》)
- (2) ……摇头不算点头算，来个干脆的。(老舍《茶馆》)
- (3) 掌柜的，长辛店大战的新闻，来一张瞧瞧？(老舍《茶馆》)

これらの例で、VP₂は“来”によって代用されており、表面上には現れていない。しかし、これらの“来”は、話し手の意思表示や聞き手への要求として用いられているという点で、(25)(26)(27)の“来”と機能的に一致している。以下に示すように、これらが話し手の意思表示や聞き手への要求以外の目的で用いることができないという事実も、「代動詞的用法は〈積極性〉を表す“来”から成る“来+VP”をソースとする」という本稿の主張を裏付けるものであろう。代動詞的用法を用いた“我来！”という表現を(31)(32)のように書き換えると、〈積極性〉の意味は失われ、空間移動の意味になってしまう。

- (31) # 我已经来了！(もうすでに来た)
- (32) # 他来！(彼が来る)

さて、既に述べたように、“来”は、〈積極性〉を表す(25)(26)(27)のような用法にしろ、代動詞的用法にしろ、ある動作行為に対する話し手の積極的な意思表示、もしくは聞き手への要求を表している。しかし、そのことは、“来”自身に、話し手の意思表示と聞き手への要求という2つの意味があることを示唆するものではない。“来”の表す意味はあくまでも1

つである。話し手の意思表示や聞き手への要求といったニュアンスは、動作行為の実現者が誰であるかによって生まれてくるものであり、文脈依存的な解釈なのである。

より本質的に言うならば、これらの“来”の意味は、「発話現場における動作立ち上げの申し立て」と定義できる。これによって、実現が待たれる何らかの動作行為が、発話現場において即時的に立ち上がることを保証するのである。話し手自身が動作立ち上げの担い手となることを想定していれば、それは話し手の積極的な意思表示になるし、聞き手が担い手となることを想定すれば、聞き手に対する積極的な動作立ち上げのもちかけとなる。

ここで、“去”には代動詞の用法がないという点についても考えておかなければならない。“去”は、〈積極性〉の意味へ文法化していながら、なぜか代動詞の用法を獲得し得ないのである。

実は、同じ〈積極性〉とはいえ、“去”の〈積極性〉の用法は、“来”のそれとは大きく異なっている。例えば、自分の過去の体験を人に紹介する場面では、“来”を用いた(32)のみが許され、“去”を用いた(32')は、その場で直ちに紹介するという意味を表し得ない。

(32) 我来介绍一下我的经验。(私の経験を紹介します。)

(32') # 我去介绍一下我的经验。(私の経験を紹介してきます。)

また、先に挙げた(25)や(28)の例を見ても、同じようなことが分かる。

(25) 你去买车票，我来收拾行李。

(28) 好！好！咱们永远在一块儿，你去挣钱，我去念书。(老舍《茶馆》)

(25)において、“你去买车票”には、現場を離れて切符を買いに行くというニュアンスがなお含まれるのに対し、“我来收拾行李”は必ずしもそのようなニュアンスは感じられず、むしろ発話現場で荷物を片付ける、と解釈できる。また、(28)の例では、“去挣钱”も“去念书”も、発話現場でおこなう必要はないし、発話時点で直ちにおこなう必要もない。時を改めて異なる場所で“挣钱”し“念书”しても一向に構わないわけである。

つまり、“来”に比べて“去”は、「現場性」「即時性」に欠けるのである。こうした現場性・即時性の欠如が、“来”と“去”の決定的な違いではなからうか。当然、話し手と聞き手にとってみれば、現場的・即時的に立ち

上げられる動作行為のほうが、非現場的・非即時的な動作行為よりも、自明性が高いはずである。自明性が高まれば、省略される可能性もそれだけ増してくる。このような理由により、現場性・即時性の強い“来”が代動詞的用法を獲得し得たのに対し、現場性・即時性に欠ける“去”は、動作行為を自明のこととして処理しにくいが為に、代動詞的用法を獲得し得ないのではないかと考えられる。

こうした現場性・即時性の差は、“来”“去”それぞれの実義に求めることができるものと思われる。“来”は“咱们”の領域への到達を表す移動である為、到達後はまさしく「現場」に身を置くことになる。このことが、「その場で直ちに」という現場性・即時性というニュアンスに繋がるのだと考えられる。“去”は“他们”の領域への到達を表すものであるが、見方を変えれば、それは“咱们”の領域からの離脱であり、現場から離れていくということにはかならない。現場から離れるという実義を持つ以上、文法化を経た後も、現場性・即時性というニュアンスは欠如したままなのである。

なお、“去”の〈積極性〉を表す用法は、(29)(30)のように、話し手と聞き手以外の人物を動作者とすることができるが、これも現場性・即時性の欠如の反映であると考えられる。

要するに、話し手または聞き手による現場的・即時的な動作立ち上げを申し立てる代動詞的な表現には、話し手と聞き手により構成される“咱们”の領域への到達を表す“来”の方が、“他们”の領域への到達を表す“去”よりも相応しく、そのことが、“去”ではなく、“来”のみの代動詞的用法の発生を促した要因ではないかということである。

5. 中国語の空間ダイクシス体系

5節では、中国語の空間ダイクシスの体系がいかなる様相を呈しているかを考える。

空間ダイクシスの一般的傾向に関する研究としては Fillmore 1982 が挙げられる。Fillmore 1982:43-45 は、ダイクシスによる空間表現を「注意喚起 informing」「特定 identifying」「既知 acknowledging」の3つに分類する。注意喚起とは、ある場所に聞き手の注意を喚起する用法、特定とは「アレで

はなく「コノ××」というように指示対象を特定する用法である。既知は、話し手が「聞き手はある対象やその位置について既知である」と想定しているときに用いられる。Fillmore 1982 は、次の例を挙げこの用法を説明する。

(33) Get that snake out of this house!

(33) は、話し手と聞き手が、家の中で一匹の蛇を目の前にしている状況で発せられるものである。‘snake’も‘house’も、聞き手は既にその位置について知っているし、この発話状況には蛇や家が複数存在しているわけでもない。したがって、ここでの指示詞は、聞き手のある場所注目させる「注意喚起」でも、複数の蛇や家の中から1つを選び出す「特定」でもない。Fillmore 1982 は、これらが「聞き手はある対象やその位置について既知である」という想定の下で用いられている点に着目し、「既知」と名付けたのである。

また、Fillmore 1982 は、指示詞は注意喚起、特定を最も基本的な用法とし、既知は二次的なものであるとする。反対に、動詞‘come’‘go’は、既知が基本用法であると述べる。

中国語の“这”“那”は、ある空間に聞き手の注意

を集める注意喚起の用法を基本とする(木村 1990: 39)。そこから、その空間内に存在する対象を、“这／那 + NP₂”という形で特定する用法を獲得する。

また、指示詞の前接機能を発現させることで、“NP₁ + 这／那”や“NP₁ + 这／那 + NP₂”のような構造へも発展していく。この構造において、NP₁は、普通既知の名詞句によって担われる。このような名詞句と結合している指示詞は、当然、新たな場所に聞き手の注意を集める機能を担い得ない。また、NP₂を後係し特定する機能も、指示詞単独ではなく、前接機能

表 2

指示詞	用法	来 / 去
这 / 那	注意喚起	
↓		
这 / 那 + NP ₂	特定	来 / 去 + VP ₂
		VP ₁ ' + 来 / 去 + VP ₂
NP ₁ + 这 / 那 + NP ₂		VP ₁ ' + 来 / 去
NP ₁ + 这 / 那		↑
	既知	来 / 去

を発現した“NP₁+这/那”構造、すなわち指示詞相当句全体によって担われることになる。この場合の特定は、NP₁の所有領域内にNP₂が存在していることを示すものであり、意味的に見て、NP₂の特定により大きく貢献しているのはNP₁の方である。単独の指示詞を用いた“这/那+NP₂”に比べれば、指示詞自身の「特定する」という意味合いは大きく損なわれていると言わざるを得ない。注意喚起とも特定ともいえない、この種の指示詞は、既知用法として解釈されるのが妥当であると考えられる。

これに対し、“来”“去”は逆の拡張ルートをたどる。単独の“来”“去”は、聞き手の注意を喚起するわけでもなく、“来”か“去”かという違いを問題にするわけでもない。単に移動という事態を表すにすぎず、聞き手は、ジェスチャーなどの付加情報がなくても、その移動の位置関係を認識することができる。単独の“来”“去”はこのような状況下で用いられるものであり、したがって既知用法であると考えられる。方向補語句“VP₁'+来/去”も、同様の状況で用いられることから、既知用法であるといえる。“(VP₁'+) 来/去+VP₂”構造は、空間移動を表すと同時に、“来”“去”という移動の結果到達する場所でもって、VP₂の実現位置を特定するという構造である。これは、“这/那+NP₂”や“NP₁+这/那+NP₂”が持っている機能と同種の、特定の用法であると考えることができる。この特定機能を持つ“来”の実質的な意味が弱化し、心理的な意味を表すものへと変化したときに、ようやく“来”は「動作立ち上げ」用法を獲得できるようになり、これが“来”の代動詞的用法の基礎となるのである。

表2から、中国語でも、空間ダイクシスは一般的傾向に従って拡張していることが分かる。“这”“那”と“来”“去”は、それぞれ正反対のものを基本用法とし、正反対の方向へ拡張していく。

また、“这”“那”と“来”“去”は、意味拡張の方向こそ異なるものの、同じ用法で用いられるときは、類似の構造をとる。例えば、特定用法の場合、“这”“那”も“来”“去”も、“这/那+NP₂”“来/去+VP₂”のように、必ずダイクシス成分の後方にNPやVPを伴う形をとる。既知用法の場合には、“来”“去”の単独用法は別として、“NP₁+这/那”“VP₁'+来/去”のように、いずれも前方にNPやVPを伴う。逆に言えば、“这”“那”にしる“来”“去”にしる、ダイクシスになんらかの成分が前置する場合は

既知としての機能が活性化し、ダイクシスに他の成分が後置する場合は、特定としての機能が活性化する、ということである。そして、特定と既知が同時に活性化する場合は、前後に NP/VP を伴い、“NP₁ + 这/那 + NP₂” “VP₁ + 来/去 + VP₁” という形で表現される。

6. おわりに

本稿は、“来”の代動詞的用法を研究対象とし、主にその発生の動機を探ることを中心に議論を進めてきた。本稿では、特にダイクシスという観点から問題を解決するよう努めた。その結果、“来”の代動詞的用法とは、指示詞句の「“这/那+(数)量+N”→“这/那+(数)量”」という現象と平行する「“来+VP”→“来”」というメカニズムで発生していることを明らかにした。こうしたメカニズムが働く為の条件として、“来”は「動作立ち上げの申し立て」という意味へと文法化している必要がある。

“这”“那”と“来”“去”は、従来その関連性が指摘されることは少なかったが、ダイクシスという観点から分析をおこなえば、機能的にも構造的にも平行性を見出すことができる。“来”の代動詞的用法とは、まさにこうしたダイクシス体系の内部において発生した用法なのである。

<注>

- 1) 「代動詞 pro-verb」という用語は英語の ‘do’ のような動詞に倣って名付けたものである。なお、“来”のこうした用法を、「代動詞用法」ではなく「代動詞的用法」と呼ぶのは、語用論的制限が強く、「代動詞用法」と言い切るにはその一般性が不十分だと感じられるからである。
- 2) 刘月华主編 1998:35-40 参照。
- 3) ただし、“穿上”のような方向補語の派生的用法はその限りではない(“把衣服穿上”)。
- 4) VP₁ には、客観方向補語や“来/去”を主要動詞として用いているものも含む。
- 5) これらの表現については、木村 1983 を参照。なお、同じように2つの名詞句に指示詞が挟まれる構造で“张华这个人”“电话这个东西”のような表現もあるが、これは「张华=这个人」「电话=这个东西」と理解すべき同格構造である。(24)(25)(26)(27)のような構造とどのような関連性があるのかは議論の余地がある問題だが、本稿ではとりあえずこれらの同格構造は扱わないことにする。なお、このような同格構造については、大河内 2000 に詳しい。
- 6) 量詞の持つ「個体」化機能については、大河内 1985:63-64 を参照。

- 7) 機能的異形態という考え方については、木村 1983:304-307 を参照。
- 8) 実際の小説、劇本などの中には、“这”“那”が数量詞を介さず、直接名詞にかかる例も散見される。例えば“来看看，看看你这年轻小伙子会作生意不会！（老舍《茶馆》）”など。どのような場合に数量詞の介在が必要となり、どのような場合に数量詞の脱落が許されるのか、現段階では明確な解釈を用意できていないが、非常に興味深い問題だと言える。少なくとも、コンテキストの問題や、対象が眼前にあるか否か、熟知しているか否か、あるいは話者が対象物のどのような側面に注目しているか等さまざまな要因が絡む複雑な問題であると考えられる。
- 9) 「実存性」の問題については、木村 2004 を参照。
- 10) モーダルな意味へと弱化した“来”が VP₂ を代用できるようになる、という点は、たとえば“能”“会”などの助動詞が、“能来”⇒“能”、“会开车”⇒“会”のように、やはり後続する VP を代用できるという現象とも、繋がりうると考えられる。
- 11) 書き換えた後も文法的には成立するが、元の文と意味的なズレが生じる用例については、#を付した。

<参考文献>

- 大河内康憲 1985. 「量詞の個体化機能」, 『中国語の諸相』 53-74 頁。白帝社。
- 大河内康憲 2000. 「巧克力一詞」の文法構造—指定を表す外延性定語について, 『中国語学』 247:2-18 頁。
- 木村英樹 1983. 「指示と方位—「他那本书」の構造と意味をめぐって—」, 『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学文学論集』 292-317 頁。東方書店。
- 木村英樹 1990. 「中国語の指示詞—「コレ／アレ／ソレ」に対応するもの—」, 『日本語学』 9-3:39-47 頁。
- 木村英樹 1996. 『中国語ははじめの一步』。ちくま新書。
- 木村英樹 2004. 「中国語における無テンス性と実存化の問題」。2004 年度日本中国語学会関東支部第 5 回例会レジュメ。
- 刘月华主编 1998. 《趋向补语通释》。北京语言文化大学出版社。
- Fillmore, Charles J. 1982. Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis, Jarvella, R. J. and Klein, W. (ed.), *Speech, Place and Action*: 31-59.

<付記>

本稿は日本中国語学会第 53 回全国大会における口頭発表および 2004 年 1 月に大阪外国語大学に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。本稿執筆の過程で、熱心にご指導して下さった東京大学と大阪外国語大学の諸先生方に感謝申し上げます。